

令和7年度春季特別展

のぼさんの俳句指南

―切磋琢磨する仲間たち―

正岡子規の俳句革新は、江戸時代以来の墮落した俳壇を批判し、明治という時代にふさわしい文学としての俳句を目指したものです。今回の特別展では、俳句革新を成し遂げた子規と俳句仲間たちの成長や次世代を担う青年たちの育成に着目します。子規は「日本派」のリーダーとして、どのような指導を行ったのでしょうか。

子規の俳句指導は、主に句の批評や句会で行われました。学生時代の子規は、河東碧梧桐や高浜虚子ら故郷松山の仲間、および内藤鳴雪や五百木飄亭、新海非風ら東京の常盤会寄宿舎の仲間と句会に熱中します。彼らは子規一人の俳句指導だけではなく、互いに批評し合うことで俳句を習得していききました。

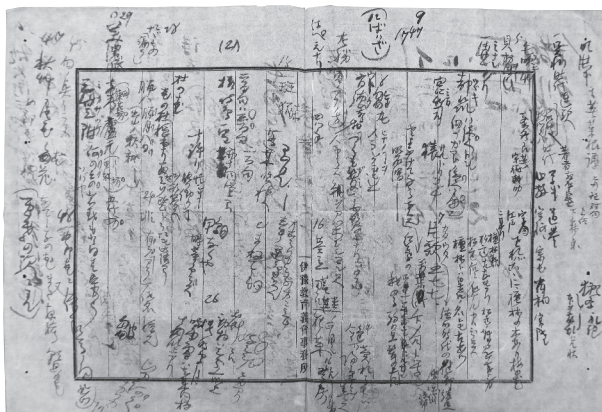
一八九五（明治二十八）年夏、日清戦争従軍後の危篤状態を脱した子規は松山に帰郷し、夏目漱石の下宿・愚陀佛庵に寄寓します。子規の元には松山の俳句結社「松風会」の人々が毎日のように集まり、実践的な指導が行われました。同年十一月、子規は東京に戻ります。上根岸の子規庵には、子規の俳句革新に共感した俳人が集まりました。彼らは盛んに議論を交わし、時には子規の厳しい批評を受けながら切磋琢磨していききました。

子規の俳句指導の特徴は当時最先端だった新聞や雑誌などのメディアを活用したこと。勤め先の新聞『日本』や松山の『海南新聞』には俳句欄が設けられ、仲間の俳句や子規の俳論が掲載されました。さらに、松山で創刊された月刊俳誌『ほととぎす』が、一八九八（明治三十一年）年に東京へ移され全国版『ホトトギス』になり、子規たち日本派の俳句活動は全国に広がりました。子規の指導を受けた日本派は盤石な組織となり、「新しい俳句」を目指す集団として、俳壇を牽引していきます。

本展では、子規の俳句指導が松山と東京の二拠点―愚陀佛庵と子規庵、『海南新聞』と『日本』―で行われたことにも注目します。グループとしての俳句修練を物語る資料を一堂に展示し、日本派のリーダーとして仲間を導く子規の姿や、切磋琢磨し合い実力を上げていく仲間たちの足跡を紹介します。

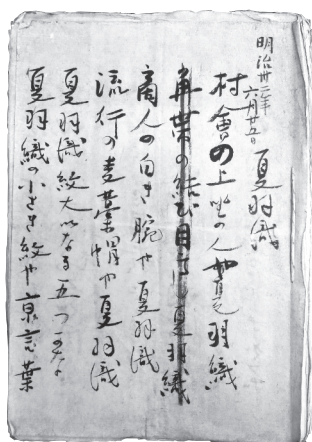


子規写真（明治33年4月5日）



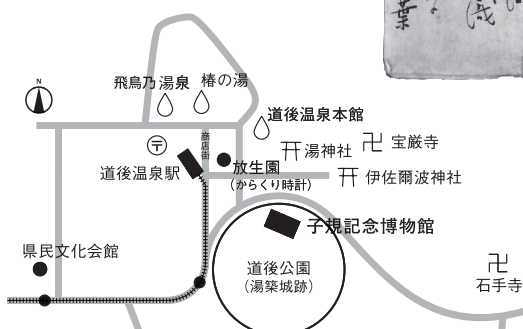
子規筆「口述筆記稿本」※『増補再版 瀬祭書屋俳話』の解説

一題十句 句会稿「夏羽織」
（明治32年6月25日）
【新収蔵資料】



五百木飄亭編「山椿一」

「土地十句集」得点表
（明治33年5月頃）



道後温泉駅より徒歩約5分／道後公園駅より徒歩約5分
※公共の交通機関をなるべくご利用ください

松山市立子規記念博物館

〒790-0857 松山市道後公園 1-30 TEL. 089-931-5566 <https://shiki-museum.com>